

# 中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

池田工業高等学校

## 12月の陽だまり歩き

12月になると大北地域から望む北アルプスの峰々は、真っ白に雪をまとい、荘厳な輝きを増し、まさに冬山の趣を示すが、同じ県内にあっても少し標高の低い里山には一般の人でも楽しめる場所がたくさんある。そんな山の一つが旧松本市と旧四賀村との境をなしている戸谷峰から三才山に続く稜線である。5日、友人と二人で戸谷峰から六人坊、三才山を經由し、烏帽子岩を廻る周回コースを歩いてきた。この戸谷峰から、美ヶ原、三峰山、鉢伏山を経て、牛伏山まで続く山域は、近年松本市がトレールコースを整備したということもあって、にわかには脚光を浴びている。眼下に松本平を見下ろしながらの北アルプスの展望道路は、天気恵まれれば最高の稜線散歩を楽しめる。そんな場所だが、僕らが今回辿ったのは整備されたそれとは違い、以前からかわらばんでも取り上げてきた送電線の監視路や稜線上を辿るオリジナルコースである。

登山口から山道に取り付いてしばらくは、送電線の監視路である九十九折れの道が沢の右岸をつかず離れずで登って行く。30分も登ると監視路は右手の尾根を横切って送電線のある尾根へと向かう。しかし、今回我々はあえてその道はとらず、地図を見ながら、稜線上の鞍部へと直接突き上げる沢をそのまま登り詰めることにした。時には意識的に道を外し、道なき道を地図とコンパスを頼りに歩いてみるのも面白い。沢は上部で二股に分かれており、我々は頂上に近い左にルートをとった。辺りには獣道が縦横無尽に張り巡らされている。時には自分たちもその獣の歩いたあとを辿っていると、わずかな脱日常であっても野生としての本来の自分の感性が研ぎ澄まされるような気もしてくる。傾斜が急になると時には手も使いながら、滑りやすい斜面に対応する我々の姿は、さながら鹿か熊のよう。とはいえ、野生動物のたくましさに及ぶべくもない我々のなんと無様なことか。沢の途中に、朽ちていく落ち葉に覆われて行き倒れた鹿の骨があった。生きとし生きる者はいつか形を失い、やがて次の生を育む源となる。自然界のサイクルはまさに「自ずから然り」なのだ実感させられる。

鞍部への急な斜面を登り詰めると、稜線には人の踏み跡が続いていた。ここから戸谷峰までは僅かな登りである。頂上から望むと、雲一つない青空の下に北アルプスの白き峰々がまるで屏風のごとく聳立していた。暫くその景色を堪能した後、葉が落ちた稜線を、落ち葉を踏みしめながら、訪れる人も少ない六人坊、三才山、烏帽子岩と1600m台の山歩きを楽しんだ。葉がすっかり落ちた林には、木漏れ陽が柔らかく差し込んでくる。夏ならば暑くて敬遠したくなるような山々も、涼しさが武器とも言える冬に訪れると、最適の陽だまりハイクが楽しめる。

## 美ヶ原で合宿、夜は遭難ゲームに興じる

14、15の両日1泊2日で、池工の12月の合宿を行った。真冬並みの寒波の襲来で、北日本は大荒れとの予報の中での実施である。そんな中での登山となれば、保護者への連絡にも気を使う。しかし、今回参加した5名の生徒の保護者はどなたも理解を示して

くださり、信頼をして生徒を託してくれた。高校生が冬山での活動を行うには、まず保護者の理解が不可欠である。僕は、日頃からできる限り保護者とは連絡をとり、こちらの意図を理解していただくよう努めている。自然相手故、絶対ということはないが、「冬山即危険」ということではないことを十分理解を求めた上で、通年の活動を認めていただくことは、信州の高校で山岳部を指導する上で極めて重要なことだ。なぜなら、雪があるから山へ行かないということになれば、年間半分は活動ができなくなってしまうのだから。管理職の理解も同様に不可欠であるが、幸い本校においては、僕が立案した計画について、今まで管理職からダメ出しをされたことは一度もない。ありがたいことだと思っている。が、逆にそれは僕にとっては責任重大、プレッシャーでもある。そのプレッシャーは、しかし事故に対する抑止力でもあり、安全登山を実施するために大きく働いている。

さて、前置きが長くなったが、この週末は三城牧場をベースに 14 日は美ヶ原へ、15 日は茶臼山へ登った。BCは、三城キャンプ場。14 日は 9:45 にテン場を出発。百曲りを経由して、11:30 に台上に出た。雪は 10 cm 弱。この時期としてはやや少なめだが、寒気の吹き出しでやはり風は強い。美しの塔まで行って一休み。人っ子一人いない台上を独り占めした池工生たちは、塔に刻まれた尾崎喜八翁の詩には何の興味も示さないが、



しかし詩に詠まれた通りの「天井が抜けたかと思ふ」「この高さにおけるこの広がりへの把握になおもくるむ」という風景には感動しているのがありあり。松本平で生まれて育った僕にとって、美ヶ原は小学校時代から登ってきた馴染みの山だが、大北地区の生徒にとっては、この広大な景色、とりわけ冬の白一色の世界は新たな感動をもたらしたようだ。強風の中、たどり着いたオアシス「高原ホテル」で、冷えた身体を温めさせてもらい、王ヶ頭、王ヶ鼻（写真左）と周り、ダテ河原を下山し、15:50 に三城に到着。

テントに戻って食事を済ませた後は、遭難対策ゲーム（写真中参照）に興じた。前号でも書いたが、いろんな話をしながら、ゲーム好きの生徒たちと今日登った山のリスクや翌日のリスク、個々人のヒューマンエラーについて、ゲームを肴に反省したり予測をしたりしながら、夜の更けるのも忘れて楽しんだ。信州の山さえ知らない生徒にとってゲームに登場してくる比良山とか高尾山とかいう名称は馴染みがないが、ゲームから低山でもリスクのあることや四季によって現れるリスクが変わることを学んだり、そこから派生して僕やコーチの山内君から、そういえばこんな山でこんな事故があったっけなどという具体的な話が出てきたりもし、大上段に振りかぶらなくても、結果として山を様々な角度から見られるようになる要素がたくさん詰まっている。

15 日は辺りが明るくなった 6 時半、ゆっくりと起床し、西から張り出して来た高気圧の恩恵を十分受けて、晴れあがった空の下茶臼山へ登った（写真右）。北アルプスは雲に覆われていたが、八ヶ岳や富士山はくっきり見え、2000m の雪山を堪能できた。